

アッサム雑種茶樹の3月さし木について

安 間 舜

(茶業試験場枕崎支場)

AMMA, S.

Studies on the Early Spring Cutting of
Assam Hybrid Tea Plant

1 はしがき

アッサム雑種茶樹を主体とする紅茶用品種の3月さし木が可能であれば、1年で苗が獲得できると考えられること、一番茶の収量や品質の検定に影響なく苗が得られることなどによつて育種年限短縮の目的にかなない、しかも農閑期に行なうことができ、面倒な処理も不要である等の利点が認められる。そこで本報ではアッサム雑種の3月さし木が発根可能かどうか、もし可能とすれば使用する枝はどのような部分が適しているか、さらにさし穂をボルドー液に浸漬した場合、地上部および地下部に効果が認められるかどうかについて調査したので報告する。

2 材料と方法

材料は代表的紅茶品種であるはつもみじおよびべにかおりを用いた。

さし穂採取に用いた枝は前年の一番茶摘採後に刈り落し、その後約1年間生育させたもので、この枝の頂芽に近い部分(上部)、中間部(中部)および基部(下部)からさし穂を採取し、どの部分が発根やその後の生育に適しているかを知らうとした。さらにこれらを300倍の三共ボルドーに3時間浸漬した場合、発根促進や地上部の生育促進効果があるかについてもあわせて調査を行なった。

第1表 さし木後65日の掘取調査結果

品種	浸漬処理	使用した枝の部位	生存率 %	発根率 %	新芽長 cm	新葉数 枚	平均根数 本	平均根長 mm
はつもみじ	ボルドー	上	70.0	28.5	5.9	4.3	0.8	0.3
		中	87.5	17.1	6.8	5.0	0.3	0.2
	水	上	60.0	4.2	6.3	4.4	0.0	0.0
		中	70.0	13.6	3.9	3.6	0.1	0.2
べにかおり	ボルドー	上	40.0	13.3	4.6	4.4	0.1	0.1
		中	32.5	6.2	5.9	4.1	0.0	0.0
	水	上	57.5	57.1	5.7	4.1	3.3	4.6
		中	57.5	47.3	8.9	5.1	1.6	1.2
	ボルドー	上	40.0	5.5	6.7	4.5	0.0	0.1
		中	55.0	22.5	3.5	3.6	0.9	1.1
水	上	67.5	33.5	4.7	4.1	1.8	1.2	
	中	67.5	15.9	5.2	4.6	0.4	0.5	

さし木後は十分灌水して直ちにトンネル式のビニル被覆を行ない、堀取りまでは灌水しなかつた。その上によらずの水平日除けを行なった。

試験は1区20本の2反覆で、3月18日にさし木し、5月22日に堀取り調査を行なった。

3 調査結果と考察

さし木後65日目の堀取調査結果は第1表のとおりである。

生存率

第1表のように3月さし木においても慣行の6月さしよりは劣るが、かなり生存することが明らかになった。分散分析の結果は品種とボルドー浸漬の間に交互作用が認められ、はつもみじはボルドー浸漬の効果が大きかつたが、べにかおりはボルドーの効果が認められない。また上・中・下の部位間については10%の危険率で下部が上・中部に比し劣ることが認められた。

しかし最も生存率が高い区でも87%で、平均は58%となり、この程度の生存率では実用性はあまりないと考えられる。

発根率

生存数に対する発根個体数で示してある。同表で明らかのように、6月さしよりは劣るが3月でも発根することが認められた。分散分析の結果、品種間および上・中・下の部位間に5%の危険率で有意差が認められ、べにかおりがはつもみじより発根率が高く、アッサム雑種の間でも品種により相当に発根能力の差があることが推察された。用いる枝の部位については特に下部の発根率が劣っていた。ボルドー浸漬の効果は有意でなかつた。

新芽長

ボルドー浸漬の有無および上・中・下の部位間に有意差が認められ、特にボルドー浸漬の効果が著しく、6月さしの場合の効果と一致する。用いる枝の部位については中>下>上の順である。ここで興味あることは水浸漬区は下・中・上の順であつたが、ボルドー浸

浸漬区は中・下・上の順となり、中央部の芽がボルドーによく反応するのではないかと思われた。

新葉数

ボルドー浸漬の有無および上・中・下の間に有意差が認められ、ボルドー浸漬の効果が特に著しく、枝の部位間では中・下部が下部よりすぐれ、新芽長とほぼ同様の傾向を示した。

平均根数

分散分析の結果、品種間に差が認められ、べにかおりがはつもみじよりすぐれており、アッサム雑種の中にも発根しやすい品種と発根不良な品種があることがわかる。この品種間差が大きいので、ボルドー液の効果および上・中・下の部位間に有意差は出てこなかったが、品種間差を除外してみるとボルドー浸漬の効果もあるように思われ、又下部を用いると根数が少ないように考えられる。

平均最長根長

分散分析の結果は平均根数の場合と全く同じ傾向で、品種間差が大きく、べにかおりがはつもみじよりすぐれていた。ここでも統計的には有意ではなかったが、ボルドー浸漬の効果もあるように思われ、上・中部が下部よりすぐれるのではないかと考えられた。

以上のようにアッサム雑種の3月さし木においても発根することが認められた。しかし生存率、発根率は6月さしに比し著しく劣るので、この程度では実用性

は認められず、今後はまず生存率、発根率を高める方法について試験を進めなくてはならない。

65日後まで生存したものについて見ると、前年の一番茶後に生育した枝の上の部分を用いるのが生存、発根ともすぐれ、発根率にボルドー浸漬の効果も認められた。

地上部についてはボルドー浸漬の効果が大きく、使用する枝の部分では中央部が特にすぐれ、上部の生育は劣った。しかし発根が早ければ根群形成後には地上部の生育もよくなることは過去の成績から明らかで、この65日後の差がそのまま最後まで続くとは考えられず、むしろその後の生育は発根率の高い上部の方がすぐれるかもしれない。この点については次の試験で明らかにしたい。

4 むすび

以上の結果からアッサム雑種の3月さし木は品種により差はあるが、前年に生育した枝の上部を用い、ボルドー浸漬を行えばかなりよい結果が得られると考えられる。しかしこのさし木法を実用化するためには、まず生存率、発根率を慣行なみの90%以上にもつていくことが当面の目標となる。そうなつて初めて個体選抜の早い時期に系統比較試験用の苗木を3月さし木で生産することができ、交配用母樹の能率的な生産にも利用でき、3月さし木が紅茶用品種育成に役立つものと考えられる。